

【論文】

ソーシャルワーカーが基盤とする価値の内在化 に関与する要因の探求 —ナラティヴ分析を通して—

菊 池 留 美

和文抄録

本研究では、ソーシャルワーカーが基盤とする価値の内在化に関与する要因を明らかにすることを目的として、15人のワーカーへの半構造化インタビューを行い、そのうち14人の語りをナラティヴ分析によって分析した。その結果、価値の内在化に影響を与えた要因は、【ゆさぶられる経験】【実践と省察の積み重ね】【実践／教育に関わる他者からの教え／関係性】、【個人的な要因】に分類された。実践や個人的な経験を通して生じた、クライエントと共にあることの認識と社会の不条理さに対する懐疑が、ソーシャルワークの価値を醸成する一つの契機となっていた。また、教員や先輩支援者からの承認や関係性が価値の認識の深化に寄与したことが示唆された。ワーカーが基盤とする価値は経験とふり返りの循環を通して変遷・発展していくことから、継続した学びと省察の機会は不可欠であり、ワーカー自身の関係性に着目した養成教育・継続学習の検討が求められる。

キーワード：ソーシャルワーク、ソーシャルワーカー、価値、内在化、ナラティヴ分析

I. 研究の背景

ソーシャルワークは「価値を担う活動」(Butrym=1986: vi)と称される。ソーシャルワーカーが基盤とする価値は、実践の際の判断や方向性に影響を与える。一方実践現場では、業務量の増大や社会的要請によって、ともすれば効率や結果が求められる現実がある。こうした状況下にあっても、目の前のクライエントに向き合い寄り添

2025年6月30日受付／2025年11月12日受理
KIKUCHI Rumi
同志社大学大学院社会学研究科
E-mail: rsk14960@gmail.com

いながら、その背後にある社会構造をも捉えるソーシャルワーカーにとって、実践の根幹となる専門職としての価値は不可欠である。

そのため養成教育では、専門職としての価値に関する学びが含まれてきた。しかしその価値意識が与えられたものである限り、自らの専門職としての内発的動機や行動規範の必然性に結びつけるには、抽象的で観念的なものに留まりかねない(太田2004)。ソーシャルワーカーは、専門職としての価値を単に知識として獲得するだけではなく、内在化していくことが必要となる(福島2015: 95)。はたしてソーシャルワーカーが専門職としての価値を内在化していくプロセスには、何が影響を与えているのだろうか。

なお本稿では、Levy (=1983)、小山 (2003)、Banks (2021) による意味づけを参考に、ソーシャルワークの価値を「ソーシャルワーカーが実践において何を目指すのか、何を大切にするのかに関する信念であり、ソーシャルワーカーの態度や行動に影響を与えるもの」と規定する。

II. 先行研究の検討と本研究の目的

ソーシャルワークの価値や倫理に関する教育方法は、先行研究で多数論じられている。特に、実習 (石川・今井 2003; 南出 2017) や演習 (松平 2003; 木村・槙原 2009; 川村 2017; 池本 2018) における、価値に関する教育実践は複数報告されている。また、学生のレポートやアンケート、インタビュー等を用いて、教育効果を検証する調査もなされている (横田 2000; 中村 2007; 山内・栄 2017)。一方、ソーシャルワーカー (以下、ワーカー) 自身が専門職としての価値を何によって体得してきたかに焦点を当てた研究は見当たらない。

そのため、類似概念の先行研究を探索することとする。横山 (2008: 134) は、精神保健福祉領域のワーカーを対象とした調査から、援助観の生成には、自らの援助そのものを問い合わせざるを得なくなる「疲弊体験」が重要契機となることを見出した。福田 (2017: 161-2) は、ワーカーの自己生成には「節目」という変容の契機があり、この「節目」となる臨床体験は「問い合わせ」との往還構造を含む「巻き込まれている」という円環構造を有していることを示した。両研究からワーカーの援助観や自己生成の契機には、ワーカー自身が予期しない実践経験との対峙が存在すること示唆される。

次に、「ソーシャルワークの価値を自分自身のうちに取り込み、内在化させて形成された」(梅崎 2002: 31) 専門職としてのアイデンティティ形成に関する研究を概観する。大谷 (2022) は、インタビュー調査から、専門職アイデンティティの形成の背景に、職場を含む環境と本人の専門職イメージが影響することを示した。諸外国の研究

では、ワーカーのアイデンティティ形成には、ワーカーとして認識され評価されること、支持的な人間関係や専門的研修、専門的セルフケアの仕組みなどのつながりや社会資源にアクセスできること (Moorhead 2021), スーパービジョンに対する満足感 (Levy, Shlomo and Itzhaky 2014; Mo, Tsang and Wong et al. 2023) が影響を及ぼすと示されている。これらの結果から、ワーカーのアイデンティティ形成には、周囲との相互作用が一定の影響を及ぼすことが推察される。

また、「人々がさまざまな職業に固有の価値・態度や知識・技能を、職業につく前に、あるいは職業につくことにより内面化していく累積的な過程」(森岡 1993: 753) である職業的社会化についての研究もいくつか見られる。Barrett (2004) は、ロールモデルの存在、ジレンマとの対峙や重要他者との相互作用、前職経験が社会化に影響を与える可能性があると指摘した。Miller (2010) は、養成機関入学前から養成期間、卒業後のキャリア時期の全期間を通じて、必ずしも直線的ではないが段階的に発展するものとした。これらから、養成課程の前後を含めた期間における要因があることが示唆される。

最後に、一定の蓄積が見られる看護観の研究を参考にする。看護観とは、「看護の対象者と対峙し自己の看護を俯瞰することを通して、看護に対する自己洞察から得られる看護専門職業人としての行動の指針となる価値観」(萩野谷・日高・森 2019) と定義づけられている。学生を対象とした看護観の要因に関する調査では、実習 (吉本・横川 2004; 安藤・加世田・中越ほか 2007) やマスメディア、家族 (吉本・横川 2004) が挙げられた。また実践者を対象とした看護観に関する調査では、忘れられない看護経験との向き合い (村瀬 2014; 畑中・伊藤 2016; 大永 2021), 目指す看護に沿った実践の積み上げ (畑中・伊藤 2016), 患者や家族との出会いや関わり (村瀬 2014), 人々との出会いの中での学び (村瀬 2014) と看護を離れた学び (大永 2021) がその形成の要因として見出され、さらに看護觀は変遷していくことが示された。以上の結果から、看護

観へ影響を与える因子には、実習、印象的な看護経験との向き合い、実践の積み上げ、患者・家族との出会い、学び、個人的な出来事があると整理できる。

これらを総合すると、ソーシャルワークの価値に関連する概念（援助観、ワーカーの自己生成、専門職アイデンティティ、職業的社会化、看護観）には、養成機関入学前から養成課程、実践者としての期間に至る過程における、実習教育、印象的な（時にネガティブな）実践経験、実践の積み上げ、スーパービジョンや先輩支援者等との相互作用、周囲の環境、学び、さらには個人的要因が関与していることが示唆された。そこで本研究では、これまで明確に取り上げられてこなかった、ワーカーが基盤とする価値の内在化に関与する要因を探ることを目的として調査を行った。その上で、調査結果と関連概念の先行研究から得られた知見との関連について論じることとする。

III. 調査方法

前述の先行研究から、類似概念に影響を及ぼす要因には実習や実践といった実践者に共通する経験があるものの、それが本人にとってどのような経験だったか、どう捉えたのかが鍵になると考えられる。また個人的な経験による影響も看過できない。よって本研究では、ワーカーが基盤とする価値の内在化に影響を与えた経験等に対する本人の意味づけに着目するため、質的研究を行う。

1. 調査協力者

ワーカーの熟達には臨床経験が必要だとされる（石原 2020）。一方、保正・鈴木・竹沢（2006: 256-88）による調査では、経験年数の浅いワーカーも倫理的ジレンマに対して行動している様相が示され、保正（2017）による経験年数と実践能力の関連を解明する調査では、ソーシャルワークの価値に関連する「患者の最善の利益追求」項目については経験年数による有意差が認められなかった。また福田らの研究（2017: 17）は、ワーカーは入職 1 年後頃から実践的な判断を行い、

専門的自己を徐々に形成していくことを示した。そこで本調査では、社会福祉士または精神保健福祉士の資格を所持してソーシャルワーク実践を行っており（もしくは行っていた）、2 年目以降の経験年数をもつ者を調査協力者（以下、協力者）とした。また、ソーシャルワークの価値は分野を問わない共通基盤であることから、多様な分野のワーカーに調査協力を依頼した。職能団体への紹介要請および機縁法を用いて、本調査の目的を理解した者に調査依頼を行った（表 1）。

表 1 調査協力者

ID	実践年数	年齢層	実践分野
A	2~4 年	20 代	児童
B	2~4 年	40 代	児童
C	5~9 年	50 代	障害
D	10~14 年	50 代	障害
E	10~14 年	30 代	児童
F	10~14 年	50 代	児童
G	15~19 年	40 代	医療
H	15~19 年	50 代	生活保護
I	15~19 年	60 代	児童
J	20~24 年	40 代	地域
K	20~24 年	50 代	高齢者
L	20~24 年	50 代	障害
M	25~29 年	40 代	医療（精神）
N	25~29 年	50 代	母子
O	35~39 年	60 代	地域

※実践分野は直近に従事していた分野とした

2. 調査方法

協力者に対して半構造化インタビューを実施した。調査時期は 2024 年 11 月から 2025 年 2 月までで、インタビュー場所は各協力者と相談の上で第三者が内容を聞き取ることができるような場所を除外して決定した。協力者のうち 2 名に対してはウェブ会議システムにて実施した。インタビュー時間は 41~90 分であり、協力者の承諾を得て、IC レコーダーを用いて録音を行った。質問項目は、①協力者の基本属性、②協力者にとってのソーシャルワークの価値とその実践例、③その価値をもつことに影響を与えた出来事、④その他、である。

3. データ分析方法

データ分析は、テーマ的ナラティヴ分析 (Riessman=2014) を用いた。テーマ的ナラティヴ分析では、「語られていること」、つまり言葉によって示される出来事や認識（語りの内容）を重視し、一つのストーリーを損なわずに分析を進める (Riessman=2014: 101-9)。またナラティヴ分析は、語り手がどのような出来事を取り上げるのか、それをどのような言葉で表現するのか、そしてどのように連ねるのかに注目する (能智 2005: 132)。本研究は、個々のワーカーが基盤としている価値とそれに影響を与えた要因とのつながりや意味づけに着目するため、この方法が有効だと考えた。

分析手順としては、Riessman (=2014), 宮坂 (2021) を参考に次のように行った。①インタビューデータの逐語録を作成、②逐語録から各協力者が基盤とするソーシャルワークの価値と、その価値に影響を与えた出来事や出会い等について語られている部分を抽出して簡潔に記述、③価値に影響を与えた出来事や出会いを抽象化してサブテーマを設定した上で、各協力者のサブテーマを比較してサブテーマ名を統一 (表 2)、④サブテーマを分類し、上位のテーマを設定した (表 3)。また協力者によるメンバーチェッキングを行い、信憑性の確保に努めた。

表2 ソーシャルワーカーが基盤としている価値と、価値に影響を与えた出来事や出会い

基盤としている価値	価値に影響を与えた出来事や出会い	サブテーマ（左欄の抽象化）
A クライエントが自分の人生を歩むために、事象の背景に目を向け、本人の思いを大事にする	・中高生時代の家族の不調への対応と和解 ・自らの関わりによる子どもへの影響を実感 ・実践の振り返り	・プライベートでの試行錯誤 ・省察しながらの実践の積み重ね
B 子ども本人を置き去りにしないことにこだわり、家族の背景にも目を向けて伴走する	・障害のある我が子を育てる中で本人の思いを模索する ・養成施設の教員の教えとフィードバック ・実践の積み重ね	・プライベートでの試行錯誤 ・教員との関係／教員からの承認 ・省察しながらの実践の積み重ね
C クライエントの力を信じて距離感を大切にし、話を受け止めて解決のためのつながりを考え続ける	・実習での助言 ・養成施設の教員の言葉 ・クライエントとの関わりの積み重ね ・一つずつの解決で関係性を深めた実践	・先輩支援者の教え ・教員の教え ・省察しながらの実践の積み重ね

なお、同インタビューの質問項目②については、ソーシャルワークの価値に基づいた実践とそれを支える要素に焦点を当てて別途分析し、別稿として投稿中である。

4. 倫理的配慮

本調査は「日本ソーシャルワーク学会研究倫理指針」に基づき研究を進めた。調査の前に、筆者が在籍する同志社大学社会学部・社会学研究科倫理審査委員会の承認を得た（申請番号 2024_0014）。その上でインタビュー前に協力者に対して、研究の主旨、個人が特定されないように配慮すること、録音の許可、研究への協力は任意でありいつでも撤回できることを説明し、書面にて同意を得た。

IV. 結果

協力者は 15 名で、そのうち 14 名からワーカーとして踏まえている価値に影響を与えた出来事等が語られた。14 名のナラティヴを対象に分析した結果、10 のサブテーマが見出され（表 2）、4 つのテーマ（【ゆさぶられる経験】【実践と省察の積み重ね】【実践／教育に関わる他者からの教え／関係性】【個人的な要因】）に分類された。（表 3）。

ソーシャルワーカーが基盤とする価値の内在化に関与する要因の探求

D	自分の価値観を脇に、目の前のクライエントを愛し、クライエントとともに挑戦する機会を作る	<ul style="list-style-type: none"> ・短大時代の教員の影響で障害児と出会う ・クライエントや家族との実践の積み重ね ・精神障害者の地域生活の難しさに触れて、現状へ怒りを抱く 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員との関係 ・省察しながらの実践の積み重ね ・社会問題の認識
E	クライエントへの敬意を持ち、専門職としての責任を自覚して丁寧にクライエントの話を引き出す	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の教員からの承認と仲間との関係 ・実習でのクライエントと支援者の姿 ・クライエントと同じ目標をもち、専門職としての責任を自覚して、実践を積み重ねる ・部署によって異なる周囲からの評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員との関係／教員からの承認 ・仲間との関係 ・先輩支援者の姿 ・クライエントとの出会い ・省察しながらの実践の積み重ね ・実践現場の環境
F	社会規範に疑問をもち、変化の可能性を信じて、クライエントの思いを汲み取ることを大事にする	<ul style="list-style-type: none"> ・元々の性格 ・発言を控えていた子ども時代 ・大学時代の教員と仲間の存在 ・危機的な状況における教員からの応答 ・クライエントと社会および自らの変化を実感 	<ul style="list-style-type: none"> ・元々の性格 ・プライベートでの試行錯誤 ・教員との関係／教員からの承認 ・仲間との関係 ・省察しながらの実践の積み重ね
G	組織における役割を果たし、ソーシャルワーカーとしてクライエントの役に立つ	<ul style="list-style-type: none"> ・クライエントの役に立てなかつた経験 ・研修や学会発表での先輩支援者の言葉 ・専門職が集まる職場で、専門性を發揮する ・実践の積み重ね 	<ul style="list-style-type: none"> ・至らなさを感じた実践 ・先輩支援者の教え ・実践現場の環境 ・省察しながらの実践の積み重ね
H	クライエントが自分らしく生きができるよう、関係性を肝に、本人の選択を支える	<ul style="list-style-type: none"> ・自信を喪失した実践経験 ・キャリアへの思いが碎かれ、社会のレールを降りる ・実践の積み重ね 	<ul style="list-style-type: none"> ・プライベートでの試行錯誤 ・省察しながらの実践の積み重ね
I	クライエントの意思を大事に、クライエントと同じ立ち位置で方向性を広げて、タイミングを待ちながら共に考えていく	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩支援者の教えや姿 ・関わりを大切にする実践の積み重ね ・至らなさを感じた実践を含めた実践の積み重ね 	<ul style="list-style-type: none"> ・先輩支援者の教え ・至らなさを感じた実践 ・省察しながらの実践の積み重ね
J	クライエントと向き合い、自らがゆらぐことを放棄せず、仲間と共に支援していく	<ul style="list-style-type: none"> ・元々の性格 ・自分と同じ夢をもつクライエントとの出会い ・先輩支援者から教わった視点 ・仲間と共にクライエントの生活に寄与 	<ul style="list-style-type: none"> ・元々の性格 ・クライエントとの出会い ・先輩支援者の教え ・省察しながらの実践の積み重ね
L	クライエントが大切にしていることを尊重して、信頼関係を構築しながら、プロセスを進む	<ul style="list-style-type: none"> ・困っている人を気にかける性格 ・自らの試行錯誤してきた経験 ・研修の講演で学んだ理念 ・職能団体での人や本との出会いや研修 ・学んだ内容を意識した実践の積み重ね 	<ul style="list-style-type: none"> ・元々の性格 ・プライベートでの試行錯誤 ・先輩支援者の教え ・仲間との関係 ・省察しながらの実践の積み重ね
M	クライエントとの対等性に葛藤し続けながら、クライエントと共に悩み、考えていく	<ul style="list-style-type: none"> ・輪に入れない人を気にかける元々の性格 ・実習先の学校や福祉施設で感じた違和感 ・大学時代の教員の教えと教員との関係性 ・クライエントと対等でないことに悩み続ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・元々の性格 ・社会問題の認識 ・教員の教え／教員との関係 ・省察しながらの実践の積み重ね
N	ジェンダーの視点を軸に、クライエントを尊重し、社会にも関与する	<ul style="list-style-type: none"> ・クライエントとの出会いから、クライエントの生きづらさを知る ・生きづらさの背景の社会構造に気づく 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会問題の認識 ・省察しながらの実践の積み重ね
O	一人の人と付き合うことを大切にしながら、困りごとの背景にある社会に目を向ける	<ul style="list-style-type: none"> ・クライエントから地域生活の困難さを教わる ・クライエントの尊厳を守るかかわり ・実践を通して、クライエントの変化を実感 	<ul style="list-style-type: none"> ・クライエントとの出会い ・省察しながらの実践の積み重ね

表3 ソーシャルワーカーがもつ価値に影響を与えた出来事や出会い

テーマ	サブテーマ	調査協力者
ゆさぶられる経験	クライエントとの出会い	E, J, O
	社会問題の認識	D, M, N
	至らなさを感じた実践	G, I
実践と省察の積み重ね	省察しながらの実践の積み重ね	A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, L, M, N, O
	実践現場の環境	E, G
実践／教育に関わる他者からの教え／関係性	仲間との関係	E, F, L
	教員の教え／教員との関係／教員からの承認	B, C, D, E, F, M
	先輩支援者の教え／姿	C, E, G, I, J, L
個人的な要因	プライベートでの試行錯誤	A, B, F, H, L
	元々の性格	F, J, L, M

一人ひとりのナラティヴでは、多様な要因が絡み合って語られた。以下に、各テーマの説明と、当該テーマが含まれているナラティヴの一部を記す。ソーシャルワーカーが大事にしている価値と実践を〈 〉、テーマを【 】、サブテーマを〔 〕、協力者の言葉の引用を「 」で示す。

1. ゆさぶられる経験

【ゆさぶられる経験】としては、〔クライエントとの出会い〕からクライエントの尊厳を実感した経験（O）やクライエントの姿が印象に残って後の実践に影響を及ぼした経験（E）、クライエントとの関わりからその背景にある〔社会問題を認識〕（D, M, N）した経験、また〔至らなさを感じた実践〕がその後の実践に影響を与えていたこと（G, I）などが語られた。以下、このテーマについての言及が含まれるJ氏の語りを再構成して要約したナラティヴの一部を記す。

〈クライエントと向き合い、自らがゆらぐことを放棄せず、仲間と共に支援していく〉

J氏は地域での総合相談業務に携わっている。振り返ると、夜間の精神保健福祉士養成校在学中に日中働いていた作業所のメンバー（利用者）であるSさんのことが思い起こされる。SさんはJ氏と同年代で、J氏にパソコンをはじめいろいろなことを教えてくれたメンバーであった。ある日の“将来の夢を書

く”というグループワークで、Sさんの夢とJ氏の夢が同じであることがわかった。“幸せな家庭を築きたい”という夢。このことは当時のJ氏にとって「ショック」であった。「『自分とSさんは何が違うんだろう』『人はそれぞれ叶えたいものがあるのであるのだから、さまざまな理由でハンデを負っている人達に何ができるんだろう』と思ったのかもしれません」。

その後、養成校卒業後の職場の上司からは、状況や全体を捉える視点の重要性を教わり、影響を受けた。また、実践の中ではクライエントとの関わりから学んできた。たとえば、最初はJ氏一人で抱え込んで対応していたクライエントの支援において、クライエントが信頼できる支援者を粘り強く時間をかけて拡げたことで、そのクライエントは自分で決断をして穏やかな生活を送るようになった。「相談者さんから学ぶことが、一番体感としてはある」が、迷ったときは「先輩たちの言葉を思い浮かべながら」振り返るようにしている。そのため、いろいろな人に会って話を聞いて、参考になる言葉を書き残している。

現在、「支援者が脅威的な存在になり得ることを意識」するようにし、また「ゆらぐことを放棄しないことを大事にしたい」と思っている。「相談に訪れる人の表情や温度を感

じると、同じ人は一人もいない」。その人の抱えているものに向き合おうとすれば、自分もゆらぐ。だからこそ自分の価値観で支援し切ろうと思わずには、ゆらぎを仲間と共有しながら、仲間と共にその人を支えていきたいと考えている。

J氏はSさんと一緒に人として関わる中で、自らとは異なるSさんが置かれた状況の困難さを強く意識する出来事に遭遇し、その不条理さに疑問を抱く同時に専門職となる自らが問われるようにも感じてゆさぶられたのではないだろうか。その後J氏は、一人ひとりのクライエントと向き合うことを大事にしている中で、ワーカーとしてゆらぎを感じることがあるが、そのゆらぎを手放さずに仲間と共有しながら実践を積み重ねている。

その他の複数の協力者からも、ある人との出会いや特定の場面へ遭遇が、ワーカーのこれまでの意識を再考させ、ワーカーとしての視点や自らに可能な実践を模索する契機となったことが語られた。

2. 実践と省察の積み重ね

【実践と省察の積み重ね】は全分析対象者に見出された。【省察しながらの実践の積み重ね】としては、マイナスの思いの残る実践のふり返り(A, D, I)、価値を意識した実践の積み重ね(B, C, E, G, H, I, J, L, M, N)、実践を通じたクライエントの変化の認識(A, F, O)が語られた。また【実践現場の環境】としては、職場環境が専門性を意識化する要因になるという語り(G)と、職場の雰囲気がソーシャルワークの価値の維持に対して否定的要因にもなり得るという語り(E)があった。以下、I氏の語りを要約して再構成したナラティヴの一部を記す。

〈クライエントの意思を大事に、同じ立ち位置で方向性を広げて、タイミングを待ちながら共に考えていく〉

I氏は子どもに関わる相談業務に携わって

いる。虐待対応の業務に就いて間もない頃、尊敬しているMSWの助言や障害分野の支援者の姿から、クライエントとかかわることの重要性を学んだ。自らも、家族との関係が希薄なクライエントの支援において、一時的な支援であったが、「先を求める」で「精一杯その人がほっとする時間を作る」ことを大切にした経験がある。必要な時には「持ち出しの支援」を行うことや、「一生懸命かかる」とことが大切だと感じている。

一方これまでの実践の中で、クライエントを傷つけてしまったり、関係を断たれてしまったこともあった。こうした経験を振り返り、クライエントと「同じ目線で考えていなかつたのかもしれない」と自問しながら、実践を積み重ねてきた。

支援に際して、「基本的には、相談者の意思を一番大事にする」。しかしその意思を尊重することが、時に子どもへの虐待を容認することになりかねないこともある。それを修正するのではなく、クライエントと同じ位置に立ちながら、「見える方向を広げる手伝い」をして、「結局、一緒に考えていくところだろうな」と感じている。さまざまなケースを経験する中で、環境やクライエント本人のタイミングが整わなければ、クライエントは一步踏み出すことができないということがわかつってきた。方向性を広げる関わりをしながら「待つって大事だなってやつと思えるようになった」と感じている。

I氏は、先輩支援者の言葉や姿勢から学びを得るとともに、かかわりを大切にした自らの実践の継続からその意義を確認してきた。また関係構築が十分にできなかったと感じた実践をふり返り自問する過程で、クライエントと同じ位置に立ちながらともに考えることの重要性を実感してきた。

各協力者の語りからも、実践の継続にとどまらず、省察とその成果を意識した実践の循環を通して、ワーカーが基盤とする価値が醸成され、変遷し、発展していくことが示唆された。

3. 実践／教育に関わる他者からの教え／関係性

【実践／教育に関わる他者からの教え／関係性】

としては、学生時代や職能団体の「仲間との関係」(E, F, L), 教員からの助言や承認された経験といった「教員の教え／教員との関係／教員からの承認」(B, C, D, E, F, M), 実習や実践での先輩支援者の姿や助言といった「先輩支援者の教え／姿」(C, E, G, I, J, L)といった要因が見出された。以下、このテーマの言及を含むB氏の語りを再構成して要約したナラティヴの一部を記す。

〈子ども本人を置き去りにしないことにこだわり、家族の背景にも目を向けて伴走する〉

B氏は、障害のある自身の子どもを育てる中で学校のPTA役員として活動し、同じ立場の保護者から相談を受けることもあった。しかし、根拠をもたずに相談に応じることに不安を感じ、社会福祉士養成施設へ入学した。そこである教員から大事なことを教わり、また相談援助演習のレポート内容を認められたことがあった。それは「今まで行き当たりばったりで、考えながらやってきたことが、正解だったのかなって思えた瞬間」であり、非常に印象に残っている。

現在スクールソーシャルワーカーとして、「子ども本人を置き去りにしない」ことに「こだわって活動」している。たとえば、登校が難しい子どもに対しては、関係性を構築しながら学習の機会を模索し、時には学校の先生に「(登校させることを)諦めてください」と伝えることもある。子ども本人の思いを大事にするという姿勢には、「ものを言えない(自身の)子どもがいるから」という背景がある。今でも、我が子の笑顔や姿から、本人の思いを尊重できているかを問い合わせている。また実践では、情報にたどり着けない潜在的なニーズをもつ家族にアウトリーチを行い、伴走する支援を大事にしている。これは、自分が親として福祉サービスを利用していた時には、サービスにアクセスできていた

ために気づかなかつたことである。実践の中でこの重要性を深く実感している。

B氏は、自身の子育て経験を通して試行錯誤を重ね、養成課程の教員からの承認や関係性によって支援の軸の確信を得ることができ、さらに実践を通してクライエント本人の思いの尊重とその環境へのはたらきかけの重要性を信念として取り入れている。教員との関係性はB氏に影響を与えた出会いの一つになっている。

その他の複数の協力者からも、他の支援者および教員の姿勢や助言とともに、関係性そのものがワーカーに影響を与えていたことが見出された。

4. 個人的な要因

【個人的な要因】としては、[プライベートでの試行錯誤](A, B, F, L)や子どもの頃からの「元々の性格」(F, J, L, M)といった要因が語られた。以下、このテーマの言及が含まれたH氏の語りを再構成して要約したナラティヴの一部を記す。

〈クライエントが自分らしく生きることができるように、関係性を肝に、本人の選択を支える〉

H氏が働き始めて間もない頃、更生施設で男性の利用者を支援していた際には、利用者と男性同士ということや自分の若さ、決められた条件と時間の中で方向性を決めなければならない中で、「これでいいよね」と説得するような、「自分がある程度道筋を作つてそれに乗せる支援」をしていたと思っている。

その法人で10年ほど働いた(育児休暇含む)後、キャリアアップを念頭に転職し、児童虐待対応の業務に就く。そこでクライエントである親と信頼関係を形成しながら対応しようと取り組むが、そうすると、時間がかかり記録が溜まり疲弊して、疲弊すると相手の話を聞けなくなつて関係性がうまくいかなくなりクライエントから責められ、上司からも詰問を受けて「力尽きて」しまった。一方

で、職場で仕事ができる人たちは「関わりが上手というより」も「要領よくできる人」で、それも「カルチャーショック」だった。それは H 氏にとって「相当自信を奪われた経験」であり、同時に「相方（妻）と収入の差がある」中で、「キャリアアップができればという野心がペちゃんこに」なった経験でもあった。この経験は「失敗したっていう位置づけになるんだけれども、結果いろんなことを手放すことができた」。

その後 H 氏は転職し、時間的にゆとりのある非常勤職に就いた。自身の子どもたちのためにきちんと食事を作るようになると、「喜ぶ子供たちがいて、生活が豊かだな」と感じた。また、合わないシステムの中で苦痛を感じていた自身の子どもが、新しい環境で「息を吹き返していく」姿を間近で感じた。その中で、「男性としてっていう社会的な束縛があったんだけれども、手放すことができた」。そして、「自分自身がレールを降りた結果、自分らしく生きていくって大切なと思ったら、やっぱり利用者にも自分らしく生きてほしい」と思うようになった。現在は、「本人が本当に望んでいることに沿って支援したい」ため、周囲の機関からクライエントへの圧力を和らげながら、自らの立ち位置を自覚するようにして（「無自覚でいると抑圧してしまう可能性がある」ため）「相手のフィードバックをよく見ながら」、「クライエントとの関係性の質を良いものにすることを肝に」支援を行っている。

H 氏は、実践やプライベートでの経験を通じて自らが縛られていた社会規範を手放した経緯があり、クライエントや自らにとっての「自分らしく生きる」ことの重要性を再認識した。その後の支援では、周囲からクライエントへの風当たりが強い中でも「本人が本当に望んでいること」を模索し、自らの立ち位置を意識しながら関係性の構築を重要視している。

他の複数の協力者においても、自らの生活の中

で生活のしづらさ／生きづらさを実感し、その後にある社会構造を意識化する経験が、その後の実践における視点に影響を及ぼしていることが語られた。

V. 考察

1. 先行研究との比較

本調査では、ワーカーが基盤とする価値に影響を与える要素として、【ゆさぶられる経験】、【実践と省察の積み重ね】、【実践／教育に関わる他者からの教え／関係性】、【個人的な要因】が見出された。前述のソーシャルワークの価値の関連概念に関する先行研究と同様の結果が確認されたと言える。

加えて本調査において新たに見出されたのは、実践や個人的な経験を通して、クライエントと同じ社会で生きる者としての実感と社会の不条理さへの懷疑が重要な契機として語られた点である。さらに、教員や他の支援者との関係性が価値に対する認識の深化やクライエントとの関係性に影響を及ぼしたことも示された。これらについて次節以降で詳述する。

2. クライエントと共にすることの認識と不条理さへの懷疑による価値への影響

複数の協力者から、クライエントと同じ世界を生きているという認識とともに、クライエントの置かれた状況の不条理さに対する納得できない思いが語られた。【ゆさぶられる経験】などからこのような思いに直面したり、「(クライエントとの) 対等性についてずっと悩んでいる」(M) という表現に見られるように継続して問い合わせ続けている語りもあった。さらにこのような意識から、「(支援者である) 自分が社会の中にどう構造化されているかって考えないと、すぐに(クライエントに) 恥の概念を植え付けてしまう」(N)、「社会の歪みの中でソーシャルワーカーの役割がある。だとしたら何のために僕たちはここに存在しているのか」(M) といった、ワーカーとしての意識や役割に関する省察へ展開していく

語りもあった。横山（2008: 157-8）は、精神保健福祉領域のワーカーの援助觀は「生活者としてのつながり認識」を意識したものであり、その意識化は、クライエントが特殊な場で特別視されていることに対して人として違和感や反発を覚え、クライエントと「ひとりの人・生活者」として出会うことから起こると論じた。また福田（2017: 158-9）は、ワーカーの自己生成の節目となる臨床体験は、「援助する一される」という関係ではなく、能動と受動が反転したり交差したりする「中動態」で生起する事象であると考察している。本調査においても、ワーカーがクライエントと共に実感をもつとともにクライエントの置かれた状況の不条理さに疑問を抱いたことが、ワーカーの視点に作用していることがうかがえた。

さらに本調査では、【個人的な要因】がワーカーとしての視点に影響を及ぼしている語りも見られた。H氏は「今、話せて思いましたけど、結構いろんな経験してんだなって。だからそこで、やっぱり自分らしく生きてほしいって。自分もそうだし、利用者も」と語っている。竹端（2021: 171）が指摘するように、「(支援者が)対象者とともに暮らす社会の問題は、自分自身の問題でもある」し、「己にも共通する抑圧的構造に対して『それは嫌だ』と言うことは、他人ごとの問題を自分ごととして考え直す、認識の転換」となる。ワーカー自身も、社会構造の中に位置づけられ、夢や希望とともに痛みや弱さを抱えた一人の生活者であるという実感が、ワーカーとしての視点を形成する要因の一つとなっていた。

これらを踏まえると、【ゆさぶられる経験】や【個人的な要因】などを通して、クライエントと共にすることを認識し社会の不条理さに対する懷疑を抱いたことが、ワーカーとして、実践の中で何を目指し何を大切にするのかというソーシャルワークの価値を、自らの信念として醸成していく一つの契機になったと言えよう。

3. 他者との関係性による価値の認識の深化

【実践／教育に関わる他者からの教え／関係性】としては、教員・先輩支援者の助言やその姿勢に

加え、教員からの承認により価値の認識が深まったという語りや、教員や先輩支援者との関係性がその後のクライエントとの関係性に影響を与えていることが語られた。たとえば「(教員からレポートを認められたことによって)今まで行き当たりばったりで、考えながらやってきたことが、正解だったのかなと思えた瞬間」(B) や「先生たちが、僕の話に対して『うん、そうだな』と言つてくれたことがずっと残っているんです。これでいいんだと思った。意識はしていないけど、僕がクライエントに『うん、いいんじゃないかな』と言ったことが、彼らにとって『Mさんに、うんって言われた』ということになっているかもしれない」(M) という言葉に表れる。

他分野では、この点に着目した取り組みが見られる。先輩専門職との関係性に着目した取り組みとしては、松山による医学部カリキュラムにおける自己調整学習教育の試み（2021: 91-114）がある。専門職となる医学生の自己イメージを強化し自己調整学習を向上させることを目的に、臨床実習に際して、従来行われていた非構造化されたメンタリングではなく、専門職アイデンティティ形成を重視した医学生と指導医とのメンタリング・システムを構築した。その結果、医学生の内発的目標志向性が高まり、自己調整学習が促進されることが示された。松山（2021: 114）は、「多様なメンターと専門性を育むような深い対話をしていくことの重要性」を強調している。また他者からの承認を取り入れた実践者向けの研修として、畠中・伊藤（2018）による看護師を対象とした現任教育プログラムがある。このプログラムは職業的アイデンティティを育むことを目的としている。まず集合研修で看護場面を振り返って自己の看護観を形成し、現場に戻ってその看護観を意識しながら看護ケアを実施（2か月間），その後、集合研修で看護観に基づいた実践に対して他者承認を得るという3部から構成されている。プログラム実施直後には職業的アイデンティティ尺度得点が優位に高くなったが、実施2か月後には減じたという結果が見られ、継続していく職場環境整備の必要性が指摘されており、示唆

に富む。

本調査では、先輩支援者や教員からの承認や関係性が、ソーシャルワークの価値の認識の深化に寄与したことが示唆された。このことから、ソーシャルワークの養成課程および実践者の継続学習においても、学生やワーカーと教員や先輩支援者との関係性に焦点を当てた取り組みについて検討していくことが、今後の教育や実践の充実につながると考えられる。従来から、スーパービジョン関係と支援関係の重層性について強調される一方で、あまり検証されていないとの指摘がある（野村 2023: 36）。こうした状況から、「援助関係は、ケースワークの魂」(Biestek=2006: i) と表現されるソーシャルワークにおいて、ワーカー自身と先輩支援者等との関係性に着目した方策を検討することも必要ではないだろうか。さらに本調査において、価値の内在化に影響を与えた要素として【実践と省察の積み重ね】が見出されたように、ワーカーがもつ価値とそれを基盤とした実践はさまざまな経験や出会いとそのふり返りの循環を通じて変遷し発展していくことから、継続した学びと省察の機会は不可欠である。現状においては、組織によって職場内スーパービジョン体制に差異が見られることや、職能団体への加入率が低水準にとどまっていることが指摘されており（坂入 2019），体制整備も大きな課題となる。

VI. 本研究の限界と課題

本研究は、研究の主旨に同意した協力者の語りを分析したものであることから、結果の一般化には慎重になる必要がある。今後は、縦断的研究等によってソーシャルワークの価値が内在化していくプロセスについても検証を進めて知見を蓄積していきたい。

参考文献

- 安藤謎乃・加世田有季・中越登子ほか (2007) 「臨地実習前後における看護観の変化——看護学生の患者の捉え方に対する考え方の比較——」『バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌』10(2), 1-7.
- Banks, S. (2021) *Ethics and Values in Social Work 5 th*, Macmillan Press.
- Barretti, M. (2004) What Do We Know about the Professional Socialization of Our Students, *Journal of Social Work Education* 40(2), 255-83.
- Biestek, S. J. (1957) *The Casework Relationship*, Loyola University Press. (=2006, 尾崎新・福田俊子・原田和幸訳『ケースワークの原則 [新訳改訂版] - 援助関係を形成する技法』誠信書房.)
- Butrym, Z. T. (1976) *The Nature of Social Work*, Macmillan Press. (=1986, 川田誉音訳『ソーシャルワークとは何か』川島書店.)
- 福田俊子 (2017) 「ソーシャルワーカーの自己生成過程における専門的自己の構築と解体：中動態から生起する臨床体験」法政大学大学院博士学位論文（人間福祉）。
- 福島喜代子 (2015) 「相談援助の理念 I」社会福祉士養成講座編集委員会編『相談援助の基盤と専門職 第3版』中央法規出版, 94-120.
- 萩野谷浩美・日高紀久江・森千鶴 (2019) 「「看護観」についての概念分析」『看護教育研究学会誌』11(1), 15-24.
- 畠中純子・伊藤收 (2016) 「看護が体験から発展するまでの看護師の思考プロセス」『日本看護科学学会誌』36, 163-71.
- 畠中純子・伊藤收 (2018) 「看護師としての職業的アイデンティティを育むための現任教育プログラムの開発」『岩手県立大学看護学部紀要』20, 1-18.
- 池本薰規 (2018) 「社会福祉士養成教育におけるディベート実践の有用性—相談援助演習の取り組みから」『福祉教育開発センター紀要』15, 71-83.
- 保正友子・鈴木真理子・竹沢昌子 (2006) 『キャリアを紡ぐソーシャルワーカー 20代・30代の生活史と職業像』筒井書房.
- 保正友子 (2017) 「医療ソーシャルワーカーの経験年数と実践能力の関連」『人間の福祉』31, 75-89.
- 石原まほろ (2020) 「ソーシャルワーカーの熟達に関する文献研究—職業リハビリテーション従事者の人材育成に向けた示唆—」『技術科学研究』37(2), 18-26.
- 石川和穂・今井朋美「ソーシャルワーカー養成実習におけるソーシャルワークの価値伝達の重要性とその課題」(2003)『社会福祉学評論』3, 45-57.
- 川村隆彦 (2017) 「ソーシャルワーク実践の価値と倫理 [4]」『ソーシャルワーク研究』42(4), 48-54.

- 木村多佳子・榎原直美（2009）「社会福祉士養成教育における演習プログラム開発—『利用者の自己決定の尊重』を教えるプログラムー」『大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要』8, 71-89.
- 小山隆（2003）「福祉専門職に求められる倫理とその明文化」『月刊福祉』86(11), 16-9.
- Levy, C. S. (1976) *Social Work Ethics*, Human Science Press. (=1983, B. ヴェクハウス訳『社会福祉の倫理』勁草書房.)
- Levy, D., Shlomo, S. B. and Itzhaky, H. (2014) The 'Building Blocks' of Professional Identity among Social Work Graduates, *Social Work Education* 33 (6), 744-59.
- 松平千佳（2003）「ソーシャルワーク教育における専門倫理と価値の問題」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』17, 159-69.
- 松山泰（2021）『医学部教育における自己調整学習力の育成—専門職アイデンティティ形成からの視座』福村出版.
- Miller, S. E. (2010) A Conceptual Framework for the Professional Socialization of Social Workers, *Journal of Human Behavior in the Social Environment* 20, 924-38.
- 南出裕美子（2017）「「プロセスレコード」を活用した実習スーパービジョン——通信教育課程の事例から」『福祉教育開発センター紀要』14, 151-61.
- 宮坂道夫（2021）「ナラティヴ分析への誘い 看護研究における可能性」『看護研究』54(1), 70-80.
- Mo, K. Y., Tsang, W. W. and Wong E. Y. et al. (2023) Golden opportunities for resolving students' emotional disturbance in learning social work values: A 3Ps approach in fieldwork practicum, *International Social Work* 66(2), 313-28.
- Moorhead, B. (2019) Transition and Adjustment to Professional Identity as Newly Qualified Social Worker, *Australian Social Work* 72, 206-18.
- 村瀬智子（2014）「熟練看護師の看護観を変えた経験——2人の熟練看護師のライフストーリーの比較——」『日本赤十字豊田看護大学紀要』9(1), 35-54.
- 森岡清美編『新社会学事典』有斐閣, 1993.
- 中村卓治（2007）「学生の立場から捉える人間科学部の「学びの良さ」に関する検証」『人間福祉研究』5, 77-90.
- 野村豊子（2023）「スーパービジョン関係とスーパービジョンのプロセス」浅野正嗣・岡田まり・小山隆ほか編『実践ソーシャルワーク・スーパービジョン』中央法規, 36-52.
- 能智正博（2005）「質的研究がめざすもの」伊藤哲司・能智正博・田中共子編『動きながら織る、関わら考える—心理学における質的研究の実践』ナカニシヤ出版, 21-36.
- 大永慶子（2021）「精神科熟練看護師における看護観の変遷のプロセス——ライフストーリーから探る——」『明治国際医療大学誌』25・26, 1-8.
- 太田義弘（2005）「ソーシャルワークの価値と倫理」『関西福祉科学大学紀要』8, 1-15.
- 大谷京子（2022）「ソーシャルワーカーはいかにしてソーシャルワーカーになるのか——精神保健領域のソーシャルワーカーへの経年インタビュー調査」『キリスト教社会福祉学研究』55, 42-54.
- Riessman, C. K. (2008) *Narrative Methods for the Human Sciences*, Sage Publications, (=2014, 大久保功子・宮坂道夫監訳『人間科学のためのナラティヴ研究法』クロアティカ.)
- 坂入竜治（2019）「精神保健福祉士の学びを支える諸体制の特徴と関係性に関する一考察—生涯に渡る学びの理論構築に向けて」『武藏野大学人間科学研究所年報』8, 43-57.
- 竹端寛（2021）「支援者エンパワメントとAOP」坂本いづみ・茨木尚子・竹端寛ほか『脱「いい子」のソーシャルワーク——反抑圧的な実践と理論』現代書館, 157-72.
- 梅崎薰（2002）「ソーシャルワークの視点・目標・価値・倫理に関する演習」北島英治・副田あけみ・高橋重宏・渡部律子編『ソーシャルワーク演習（上）』有斐閣, 18-36.
- 山内はるひ・栄セツコ「精神保健福祉士の価値に基づいた実習教育に関する研究——指導者から伝授されたPSWの価値を実習生が体得していく過程——」『桃山学院大学総合研究所紀要』41(3), 1-21.
- 吉本知恵・横川絹恵（2004）「看護学生の痴呆性高齢者に対するイメージと看護観および影響因子——3年制看護短大生の学習進度による比較——」『日本看護学会誌』14(1), 35-45.
- 横田恵子（2000）「ソーシャルワーク領域における職業倫理教育—初学者に対する具体的な試みから」『社会問題研究』50(1), 1-15.
- 横山登志子（2008）『ソーシャルワーク感覚』弘文堂.

In Search of the Factors Involved in the Internalization of Values Underlying Social Work:

A Narrative Analysis of Interviews with Social Workers

KIKUCHI Rumi

(DOSHISHA UNIVERSITY, Graduate School of Social Studies)

Keywords: social work, social worker, values, internalization, narrative analysis

This study aimed to identify factors influencing the internalization of values that underlie social work practice. Semi-structured interviews were conducted with 15 workers, and the narratives of 14 participants were analyzed using narrative analysis. The results classified factors influencing the internalization of values into four categories: “Deeply Challenging Experiences,” “Accumulation of Practice and Reflection,” “Teachings of/ Relationships with Others Involved in Practice/ Education,” and “Personal Factors.” Through practice and personal experience, an awareness of being with clients, together with skep-

ticism toward social irrationalities, emerged as a key catalyst for the cultivation of social work values. Furthermore, it was suggested that recognition by and relationships with instructors and senior practitioners contributed to deepening the understanding of these values. Since the values held by social workers evolve and develop through a cycle of experience and reflection, opportunities for continuous learning and reflection are indispensable. Accordingly, consideration towards providing training and continuing education that focuses on the workers’ own relational dynamics was indicated.